

"Truth is the daughter of time" —新入生を迎えて—

図書館長 八 木 幹

春の陽気に誘われて、街頭に出る。本屋をのぞくと、『ある歴史の娘』の表題が目につく。著名な女流評論家の自伝のようだ。手にとった本を、再びもとの棚に戻すと、一寸構えたこの著者の題名に、古いイギリスの諺がうかんでくる。“Truth is the daughter of time.”『真実は時の娘』、時が経てば、隠された真実も明らかになる。確かに、この場合、「時」は「歴史」と読み替える事も当然可能で、忘却の彼方から、死者をして甦らせ、真実の審判を行なわしめる。『時は真実を審理す。』“Time tries the truth.”の一句を想う。

英文学史をひもとけば、中世の宗教劇にあっては、Time のとりあつかいが、近世初頭、例えば、Shakespeare 劇の場合と微妙に異なっていることに気付く。所謂、**"timeless drama"** の様相である。そこでは、過去、未来（＝最後の審判）にわたって、**"時"**の舞台が、直ちに現在に結びついて展開し、他方、天国と地獄が空間上同時に提示される。感覚の次元において、笑いと恐怖が同次元で表出、処理される。近世の Shakespeare の世界では、一方において、**"時"**の扱いが、そのまま死の偶意と重なって、移ろいゆく美、生の破壊者としての **Old Father Time** が、ソネットの世界に侵入し、青春と美に**"時の鎌"**を準備して迫ってくるのであり、他面、**"時"**は後期の劇作品に示されるように、誤解され、辱しめられた真実の和解者として、殆ど絶対者の摂理にも似た機能を果していく。時の推移に、かつて見失われた真実の相が、再びこの劇世界の中に、その存在を主張し、再確認される。中世劇と異なって、此处では、時の推移、その流れの経過に、ひとたびは見

失われた真理の様相が、あらためて照射され、登場人物の危機から和解、再生に至る過程に、吾々は生と存在の **illusion** を劇世界で経験する趣向を見出す。

古の賢者は、川の流れに時と生の表象をとらえたと聞く。流れてやまず、帰らざる水の流れは、そのまま移ろいゆく時を、生を、人に歎ぜしめたものであろう。老人が青春を回顧し、二度と返らぬ日々の光景を虚ろな視界に確かめようとするとき、彼は自ら通過した、時に惨めで、当惑すべきかつての現実面をのぞくことを既に拒否しているのかも知れぬ。青春は時に美しく、時に残酷である。時に潑刺として、時に惨めなものである。にも拘らず、生の一瞬の季節において、この春の到来に出会うものは、存分に、貴重な“未知数”を“白紙”を自ら決定し、記入する特権を持つ。現実の生の場にあっては、かの宗教劇の過去と未来が同時に洞察され、翻って現在を照らすという

“Timeless Drama” は直ちには望めないものであり、又時の推移に、死から再生へ主人公の和解を表示する Shakespeare 劇の完結性は、現実の世界では、とうてい早急には実現してこないものである。

吾々は精々自ら積極的に、正しい情報の所在を確認し、正確で有効な情報を確実に自らのものとして構築し、真理への認識をたかめる努力を続けなければならない。青春の日々を専ら学生生活に費す人間にとっては、この事は当然の義務と権利であろう。真実追求の一つの有力な場として、大学図書館が、青春の思い出を形成することを吾々は心から期待する。（文学部教授）

図書館への期待

法学部教授 中 尾 英 俊

私は図書館にかよってコツコツ勉強するような熱心な学生ではなかった。いま、試験前でもない時期に、図書館で真剣に書物を読んでいる学生諸君を見ると、敬服の念を抱かざるをえない。そのような図書館と縁遠かった私に図書館を語る資格はないが、それでも乏しい経験から、図書館にたいする大きな期待をもっている。

数年前のことであるが、研究の必要上、明治初年の村——それは同時に藩制時代の村でもあった——がそれ以後どのような分離合併を経て現在の市町村になったか、その経過を全国の都府県にわたって調査をしたことがある。町村の分離合併により古い地名がなくなるので、昔の文献を読むとき苦勞する。とくに最近の町名改正は、従来の由緒ある地名を無神経にかなぐりすてて、住民の生活感情を無視した官僚の便宜主義から、中央とか駅前とか全く個性のない名称をつけ、しかも地獄の1丁目よろしく何々何丁目何番と数字化しているので、ますます昔の地名と現在の地名との関係が分らなくなる。幸い明治初年の村と現在の地名との連関が全国的に分ったので、一般の便宜のためにも集めた資料を整理していずれ何らかのかたちで公刊したいと思っている。

はなしがあらぬ方へ行ったが、この調査の作業で図書館の効用をはだで感じた。明治以降の市町村の変遷については、大多数の都府県で、府県史あるいは市町村合併史等としてまとめられ公刊されている（ただし余り市販されてはいない）。ところが残念ながらわが図書館には、福岡県ほか2、3の県以外の分は入っていない。公刊されたものの多くは国立国会図書館に集められており、また地元福岡県立図書館にも備えられているので、全国都府県の半ば以上はこの2つを利用することによって作業をすすめることができた。ほかの府県はそれぞれ府県立

中央図書館をおとづれて資料をさがしたが、その中にはまとまった資料として公刊されていないところが少なくないので、何が然るべき資料であるかをはっきりさせることから始めなければならなかった。それでも、係りの方から資料さがしに協力して頂いたりして、ともかくも目的を達することができた。すべての都府県や大きな市の中央図書館には、地方史または郷土誌のコーナーがあり、県史や市町村誌あるいはその地方の文化や歴史等にかんする文献資料が備えられており、主にそのコーナーを利用した。ときには得難い資料に出会って大声で叫び出したいような衝動にかられたこともある。こうして図書館の有難さや近しさを改めて身と感じた。

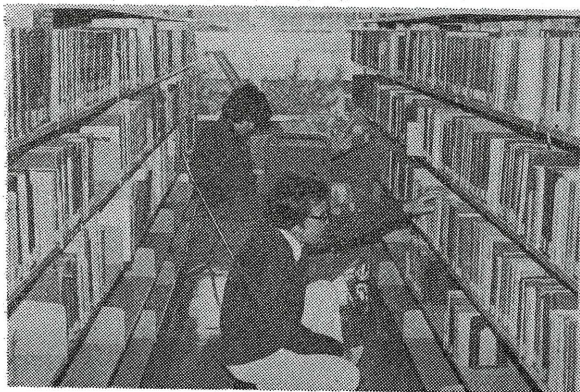
図書館にとっては、多くの人々に利用される図書文献を備えることが、まず必要である。だが、どの図書館でも同じものがそろっているというのでは魅力がない。一般の図書館にあっては、その地方の文化、歴史、社会、経済等にかんする文献資料が整備されている、ということが必要であり、それがその図書館の特色の一つであるべきだろう。特色の一つというのはそれ以外にも特色をもつことが望ましいからである。一般の図書館に比べると大学の図書館は、利用者が特定しており、その蔵書の傾向もその大学の学部や講座等によりおのずから決まってくる。そしてその故に、ある部門の図書文献が整備され、どの大学には何の部門の文献資料がそろっている、ということになる。それが大学の図書館の特色でもあり、また魅力であるが、大学がおかれた地方の文化の向上に貢献するという役割を担うことを考えると、前に述べた一般の図書館がもつべき特色を、大学の図書館にも同様に期待してよいと思うのである。

在庫調査を終えて

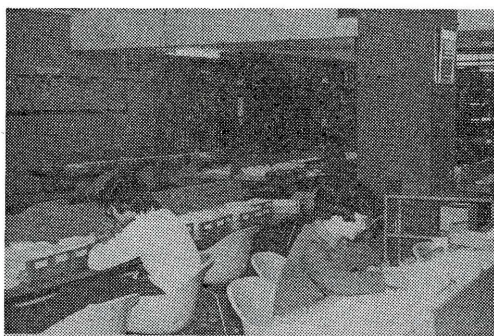
大 熊 久美子

図書館の一年間の締めくくりとして、在庫調査という大仕事がありますが、図書館関係者以外はそれがどういうものであるか、ご存知ないと思います。その主な目的は当館所蔵の図書について現物の有無の確認のための照合調査を行ない、目録・原簿等の整備をはかるものです。

これらは学院の経理規程、固定資産および物品管理規程等にもとづき、大学図書館の保管状況確認のために、その間1週間、日常の業務を離れ、閲覧室を閉室し（学習室のみ開室）、館員全員が気をひきしめて仕事にあたります。



（目録カードと本を一冊ずつ照合する作業）



（調査用目録から貸出中のカードを抜き出す作業）

内容は調査用目録から貸出中の図書をチェックし、その後、カードと図書（視聴覚資料を含む）を一冊ずつ照合し、確認します。文字にすると、簡単な様ですが、53年度現在の蔵書冊数は約30万冊で年々、16,000冊の割で増加してゆくわけですから、実際やってみるとなかなか大変なものです。それだけに、私達も、気がまえを大にして仕事にあたらねばなりません。

各パートに分かれ、分担を決めて、仕事につくのですが、普段の静粛な館内も、この時ばかりは、読み合わせなどで声をはりあげ、終わりの日が近づくと、か

浅川玉兎

「長唄名曲要説」

日本邦楽社 昭和38年

図書館に勤務していないながら、読書家ではないので一冊の本を選ぶとなると結局は趣味の本になってしまいました。

この本は十数年前、私が長唄を習い始めた頃デパートの和楽器売場で見つけたもので、その時とても良い本にめぐり会ったと喜びました。

他の分野の本はたくさん出版されているようですが、長唄の本となると非常に少く、その中でこの本が一番貴重なものではないかと思われます。

従来は師匠から、ただ三味線と唄を受け継ぐだけのものでしたが、新たにこの本によって、曲についての知識を吸収出来るようになりました。また長唄を鑑賞される方にとっても、ある程度の理解を深められるという点において今後の長唄の発展につながるものと喜んでいきます。

気がついたことですが、この本の存在を知らない人が

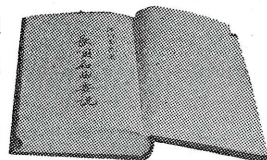
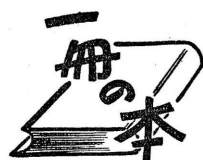
熟練者の中にも意外と多く、そういう方々に紹介して大変喜ばれています。

内容は全部で百曲ありますが、その一曲一曲の生まれた年代から作詞者、作曲者はもちろん、要約も載せられていて、1.概説、2.歌詞評釈、3.曲節の研究（三味線の弾き方、唄のうたい方）を実に丁寧に説明してあります。最近改訂版が出されてさらに良くなっています。

なお続編及び姉妹本として「長唄の基礎研究」も出版されています。

というわけで知識の方は充分についているつもりですが、さて腕前の方はというと恥ずかしながらさっぱりです。

閲覧係 大塚 美子



※ 本館所蔵（分類番号 768.5.1— $\frac{1}{2}$ ）

すれ声になり、ブックトラックをおしながら、別置された図書の照合に館内をぐるぐる廻り、日頃の運動不足も解消するようです。終わったとたんに気が抜けて何日間分の疲れが一度にでる感じです。そのあと事後処理を終えるとまた平常の図書館の姿にもどり新しい年度の始まりです。(受入係)

☆ お知らせ・ニュース・NEWS ☆

＜3階、4階の冷房設置＞

図書館は全館冷房装置設置の年次計画により、去る52年度に2階および5階（一部）に設置しましたが、本年度3階、4階開架閲覧室の冷房設置を予定しています。この設置が完了すれば、2、3、4階の学生利用の閲覧室は、すべて冷房することになり、全学部学生が等しく快適な図書館利用を楽しむことができます。

そのため、4階の資料の一部（アメリカン・センターよりの受贈図書）は一時的に4階閉架の資料室に移しますので、利用の際は2階係員にお申し出ください。

＜米国議会公聴会記録（全国共同利用外国図書購入費による購入図書）神戸大学経済経営研究所＞

昭和53年度の全国共同利用外国図書購入費が、文部省より神戸大学経済経営研究所に与えられ、それによって購入したものです。

1839年～1969年までの米国議会の公聴会の記録をマイクロ フィッシュ版で購入した。先頃その利用についての案内がきましたのでお知らせいたします。

●詳細は5階参考、資料係へお尋ねください。

なお、アメリカン・センター福岡では、1972年以降のものをマイクロ フィッシュ版で所蔵しています。

図書館案内

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。さあ今日から新しい生活よ「こんにちわ」です。図書館の中へも入ってみましょう。約30万冊の図書が、新聞、雑誌、レコード等々がみなさんとの対話を待っています。図書館といえば何か知識を身につけ、勉強しなければならないという義務感が先に立ちがちですが、気楽な本や、雑誌を利用するのも図書館利用の一つであり、要は、図書館に通ってこることによって、図書館が身近なものとなり、効果的な利用法の会得ができるというものです。

別に配布される「図書館利用案内」をよく読んでください。館内の配置、図書の所在、目録の種類やひき方、分類表、利用規則、諸手続き等が詳しくのっています。それでも不明な点はどしどし係員に尋ねてください。レファレンス サービスのための参考係もおります。

昭和54年度 図書館行事予定表

54年

2月8日（木）～4月10日（火）春季休暇

学習室閉室

4月6日（金） 新入学生利用指導（文・法）

7日（土） “ “ （商・経）

5月11日（金） 学院創立記念日で休館

7月2日（月） 夏休長期貸出開始（9月17日まで）

11日（水）～9月4日（火）夏季休暇

学習室閉室

9月8日（土）～9月27日（木） 前期試験

28日（金）29日（土） 大学休業のため休館

11月中旬 大学祭期間中 学習室閉室

12月15日（土） 冬休長期貸出開始（1月17日まで）

25日（火）～1月7日（月）冬季休暇

学習室閉室

27日（木） 開館 9:00～12:00

28日（金）～1月5日（土） 年末年始の休館

55年

1月18日（金）～2月6日（水） 後期試験

28日（月） 春休長期貸出開始

（卒業予定者は2月末日まで）
（上記以外者は4月22日まで）

2月7日（木）～4月10日（木） 春季休暇

学習室閉室

中旬 入学試験のため休館

3月中旬 在庫調査で開架閲覧室閉室

休館・閉館その他行事予定については、
そのつど、図書館の玄関に掲示します。

この図書館報は、図書館に関する色々な情報や案内をおこないます。又利用者のみなさんとの対話の場として年4回にわたって発行しております。ご意見をおよせください。（品川）